

6. 研究開発学校連絡協議会報告

丸山豊運営委員長 矢木修 齊藤真子
(運営委員) 山田孝研究部長
中村明彦 石川久美 佐藤俊樹
今村敦司(研究部)
川田基生 三小田博昭(研究委員)
福谷敏(教務部長)

7. 指導助言

- ・一方に総合人間科があり、もう一方に教科の学習がある。これらをつなげる位置づけを、選択プロジェクトと新教科群が担っているのかも少しはっきりさせた方がよい。教科教育の内容の見直しを新教科群や総合人間科の授業の中からできるのではないだろうか。
- ・中学の選択プロジェクトは観点がわかりやすいが、高校の新教科群は観点がわかりにくいのでは。教科を合わせて、何を生み出すかは難しいものがある。合科的に無理やり行うのは大変ではないか。
- ・テーマの副題について、中高一貫でどのような生徒を育てていくかという目標とビジョンがあり、それに向けたカリキュラムがあるべきである。
- ・学校文化と高度消費者文化の乖離がある。消費生活に関わる問題もどこかに入れては。
- ・大学入試の重しをはずせないが、これをどうするのか。大学側もこのような教育を受け入れる必要がある。附属で育てた生徒を学部で受け入れて、長い目で見た評価をしたい。
- ・今の生徒は、灰色の学校生活を送っているように思われる。特に高校受験を控えた中学校に一番しわ寄せがきている。それが、高校に入って解放されているのが現状である。中高一貫教育で、灰色の学校生活から解放されたと言えるような取り組みをしなくてはならない。
- ・盛りだくさんの研究であり、重なり合う部分を整理するべきである。選択教科は、教科で深く入るべきである。理論的に枠組みを作る必要もある。
- ・学校五日制をひかえて、土日をどう使うか考える時期である。土日をどう生活させるか。金曜日までの学習水準を、次の月曜日まで維持させるために、宿題を出すべきである。

8. 閉会の挨拶

(文責：山田 孝)

第2回運営指導委員会報告

平成13年11月17日(土) 9時40分～12時

於附属学校第一会議室

参加者 速水敏彦附属学校長 榊達雄教授

高木靖文教授 的場正美教授

早川操教授 大谷尚教授 吉田俊和教授

(以上教育学部)

文学部若尾祐司教授(以上名古屋大学)

京都学園大学小島秀夫教授(以上他大学)

1. 学校長挨拶

2. 運営指導委員及び本校関係者紹介

3. 授業見学

- ・ソーシャルライフー中学一年生 (2限目)
- ・選択プロジェクトー中学二年生・三年生 (2限目)
- ・総合人間科 ー高校各学年 (2限目)

4. 本年度の中等教育研究協議会について研究部長より

5. 指導助言

- ・大学院生が入って授業を行っているところは、丁寧に記録がとられている。ぜひ生徒の考えていること、生徒の頭の中のことも記録してほしい。
- ・久しぶりに授業研究を見た。大変感動した。授業そのものを発展研究していく上での枠組み、分析の方法をどうされるのか興味がある。選択プロジェクトの授業はおもしろい。時間があればもっと見てみたかった。先生方の得意な分野に生徒を引きつけて、学びをどう掘り下げていくのか。次のステップ、どういった知識体系をつくるのかこれからの広がりが大切である。
- ・ソーシャルライフの授業や選択プロジェクトの授業を見学して思ったことは、授業規模が小さい方がおもしろい。パソコンなどを使用した個々の技術を深化していくと、コミュニケーションが不足してくるのではないか。コミュニケーション能力の設定をどうするのが課題である。
- ・ソーシャルライフの授業は、最終的には学校の先生にやってもらう。ソーシャルライフの効果は、すぐにはでない。長い時間をかけて変化は生まれてくるもの。
- ・中等教育研究協議会では、途中の経過が見える資料を作っていただきたい。授業の協力者の方々の感想があるとよい。

6. 閉会の挨拶

(文責：山田 孝)